

都久夫須麻神社本殿の脇羽目彫刻について

—— 都久夫須麻神社研究序説 ——

《キーワード》 都久夫須麻神社 建築彫刻 豊臣秀頼 豊国廟 安土桃山時代

木村 展子

(神戸大学大学院文化科学研究科助手)

はじめに

滋賀県の竹生島にある都久夫須麻神社本殿の脇羽目彫刻は、安土桃山時代を代表する美術作品としてしばしば取り上げられるが、その、他にはみられない大ぶりの牡丹と渦を巻くような唐草の意匠は大胆で、安土桃山時代の自由な息吹を感じさせる(図1)。しかし、図柄の途中で切断されており、一見して本来別のところにあつたものを後からはめ込んだ事が明白である。

後述するように、都久夫須麻神社本殿は本来身舎部分と庇部分¹別の建物であり、それを慶長七年(一六〇二)に合成して現在の姿になったものである。身舎部分も桃山芸術の粋を集めた建築として非常に有名であるが、本稿では都久夫須麻神社研究の第一段階として、庇部分の脇羽目彫刻が本来いずれの建物を装飾していた彫刻であるのかという問題を中心に考察する。

都久夫須麻神社には宝巖寺が隣接するが、その唐門は豊国神社の社僧である神龍院梵舜の日記『舜旧記』の記述や渡廊から発見された墨書より、豊臣秀頼によって慶長四年(一五九九)に造営された豊国廟の遺構を慶長八年(一六〇三)に竹生島に移築したものであることが判明している。一方、都久夫須麻神社本殿は慶長七年(一六〇二)に豊臣秀頼によって造営されたもので、社伝によると伏見城の遺構であるという。都久夫須麻神社本殿に関しての本格的な研究は少なく、建築関係では昭和十一年に現状変更をとまなう解体修理をした際に出された乾兼松氏による修理工事報告書²と、昭和五十八年に発行された『日本建築史基礎史料集成 社殿Ⅲ』³所収の桜井敏雄氏による「都久夫須麻神社本殿」のみである。漆工関係では灰野昭郎氏の「都久夫須麻神社本殿の蒔絵装飾」⁴がある。さらに宝巖寺に関しては、唐門・観音堂・渡廊ともに昭和十年に解体修理工事、昭和三十五年に災害による部分修理工事、昭和四十七年に屋根葺替

工事を行っているが修理工事報告書は刊行されておらず、また論考もない。いずれにせよ、都久夫須麻神社と宝巖寺は豊臣秀頼によって続けて造営されていることから、都久夫須麻神社本殿を考える際には宝巖寺についての考察が不可欠である。

一、建物の現状と前身建築

現在竹生島には都久夫須麻神社と宝巖寺があるが、明治の神仏分離令で分かれるまでは宝巖寺は都久夫須麻神社の神宮寺であり、今も都久夫須麻神社本殿は懸造の渡廊で宝巖寺観音堂とつながる。観音堂の側面には唐門が接続し、門の横手の石段を上がると宝巖寺弁才天堂（本堂）がある。峰の斜面に建てられているため、この二堂一社は石段で繋がれ、変化に富んだ景観となっている。都久夫須麻神社本殿と宝巖寺唐門は国宝、観音堂と渡廊は重要文化財に指定されている。なお、宝巖寺弁才天堂は昭和十七年に再建されたものである。

一—— 宝巖寺

宝巖寺はかつては鐘楼や三重塔、または多くの僧坊があったが、今では本堂、観音堂とそれに付属する唐門と渡廊からなっていて、観音堂、唐門、渡廊が慶長八年に豊臣秀頼によって再興されたものである。唐門は一間一戸の向唐門で松皮葺、観音堂は桁行五間梁間四間の入母屋造・松皮葺、渡廊は二つの部分に分かれ、低屋根部分は桁行八間梁間一間の切妻造・松皮葺、高屋根部分は桁行二間梁間

一間の切妻造・松皮葺となっている。棟札が一枚発見されており、それには慶長八年に一島の伽藍すべての再興が終わったことが記されている。総奉行が片桐且元、作事奉行が雨森長助、大工は竹生島の御大工、浅井郡富田村の阿部氏で慶長八年当時の当主は太郎兵衛宗政、小工は同じく富田村の西島氏で代々竹生島の小工を勤めている。

宝巖寺唐門は『舜旧記』慶長七年六月十一日の条の「今日ヨリ豊国極楽門、内府ヨリ竹生島へ依寄進、壞始、新神門、大坂ヨリ被仰了、」という記述から、豊国廟の遺構であることが判明している。さらに、渡廊の飾金具から「豊国大明神御唐門下長押金物」という墨書銘が見つかっている。しかし『舜旧記』に言う「極楽門」「神門」が具体的には豊国廟のどの門を指すかは明らかではない。豊国廟は慶長三年八月十八日に亡くなった秀吉の霊廟として慶長四年四月十八日に建てられたものであるが、当初秀吉の死は隠されていたため、名目上方広寺の鎮守として造営された。場所は方広寺（現在京都国立博物館）の東で、阿弥陀ヶ峰の山頂に墓所を建てその西麓（現京都女子大学付近）に豊国大明神社を建立したという。現在東山に豊国神社があるが、明治になってから方広寺跡に建てられたもので、慶長四年に建てられた豊国廟は現在はその跡形もない。その豊国廟がどのような規模、構成、外観であったか知る手がかりになるのは、徳川黎明会と豊国神社所蔵の「豊国祭礼図」や桃山時代から江戸初期にかけて多数制作された「洛中洛外図」等の絵画史料と『匠明』⁶⁾『愚子見記』⁷⁾の二つの木割書である。絵画史料からは楼門以外の門は本社を取り囲む透塀に取りつく唐門しか認めることができ

ないが、「神門」が聖域への門だとすると、拜殿・本殿などを他の社殿から区画する透塀正面の唐門はそう称されるにふさわしい。しかし、現在見るように宝厳寺唐門は向唐門であるのに対し（図2）勝興寺蔵「洛中洛外図」と写本の妙法院蔵「豊国祭礼図」以外はすべて平唐門として描かれている。一方『匠明』には豊国廟の門に関する記述はなく、『愚子見記』には「唐門 一丈六寸二梁六尺五寸、四ツ柱有」と記されている。四脚門で軒唐破風をつけた同時代の西本願寺唐門や豊国神社唐門、北野天満宮中門のような門だとも考えられるが、『愚子見記』では四脚門は「四足門」と記する事が多く、平唐門と考えるのが妥当であろう。この『愚子見記』の記述が寛文年間に行なわれた豊国廟の修理の正確な記録であることと、慶長十一年に完成した豊臣氏の祭礼の記録画としての性格を持つ豊国神社蔵「豊国祭礼図」（図3）においても平唐門が描かれていることを考えると、慶長七年に竹生島に移された門は向唐門であり、その後、「大坂より仰せられた」門は平唐門であったと考える事が出来る。さらには狩野孝信筆の可能性も指摘されている勝興寺蔵「洛中洛外図」や「孝信筆」と包紙に書かれているという妙法院蔵「豊国祭礼図」が平唐門ではなく向唐門とするのは（図4、5）、兄光信とともに豊国廟作事に携わったであろう孝信が最も華やかだった創建当時の姿を再現した、という推測も成り立つ。いずれにせよ宝厳寺唐門が豊国廟の遺構であることは疑いのないところであり、花鳥の彫刻で破風下や棧唐戸を埋め尽くし、繊細な飾金具で頭貫や柱を飾るその姿は、まさに「極楽門」の名にふさわしい門である。この門からも当時の豊国廟の華やかさがうかがえる。

観音堂と渡廊はともに慶長八年に造営されたものである。渡廊は島の斜面にたつているため懸造となる。寺の伝承では秀吉の御座船を移築した舟廊下であるというが根拠はない。ただ「豊国大名神御唐門下長押金物」という墨書銘が見つかったように豊国廟の唐門の部材を転用している。観音堂は身舎の周りに一間通りの庇の間があり縁先に柱を立てているが、身舎の柱が円柱であるのに対して角柱となっている。側面の庇の間には一方に渡廊、もう一方に唐門が接続するが、唐門の控柱となる部分だけは円柱である。正面庇の間の下は崖であり開放とはなっていない。身舎は前面一間通りが外陣で後部が内陣となっていて、桁行方向の柱筋は、唐門が接続する控柱を兼ねる庇柱が一致しないだけであるが、梁間方向の柱筋では、背面の庇縁先柱が両端を除いてすべて一致しない。さらに、内陣の中心を外れたところに二本の柱があり、従来あった堂宇を一部残して改造したものと考えられる。

一―二 都久夫須麻神社本殿

神社側の伝承では、秀吉の伏見城の日暮御殿を移築したものである内部の障壁画は狩野永徳筆だという。そのような伝承が生まれるのも無理からぬところで、庇部分や身舎の外周の壁面には花鳥や牡丹唐草の彫刻がはめ込まれ、正面の棧唐戸にも草花の彫刻が施されている（図6）。また、身舎部分の長押や柱などの軸部は内外とも黒漆塗で、金蒔絵で草花が描かれている。内部は畳敷、天井は折上格天井でその格狭間・小壁・襖には草花が金箔地に描かれ、特に身舎部分は現存する桃山建築の中で最も豪華な意匠を備えている（図7）。

本殿の構造形式は桁行五間、梁間四間、向拝一間、重層、入母屋造、椼皮葺で上層は前後軒唐破風付、南面、方三間の身舎の周囲に一間の庇を巡らし両側面および背面に霧除けを設けている。そして、以下のような点から、身舎および庇部分がもともと一つの建物として建てられたものではなく、また、身舎を基準として後に庇が付加されたものでもないことが明らかである。

・身舎と庇部は柱筋が悉く一致しない。また、身舎と庇部をつなぐ構造材としては正面の四本の海老虹梁のみであるが著しく振れて納まりに無理がある。他の三面には繋ぎ材がないが、特に側面においてはあまりに柱の位置が違いすぎて取り付け不可能なためと思われる。

・庇部分の柱は円柱であるが、身舎は角柱である。

・庇部分は素木造であるのに対して身舎は漆塗で柱、長押、方立には平蒔絵を施している。

・庇の屋根は身舎の柱に取りつかず、庇部分の柱筋上部に板壁を立ち上げて身舎地垂木先端の木負の位置に納め、この位置で屋根は断ち切られている。

そしてさらに昭和十一年の修理工事で次のような発見があった。¹⁰⁾

・明らかに転用材と認められる本殿小屋組筋違に「摂州矢田部之郡舟生山之住□同右□□大式大蔵 永禄十年三月吉日」という墨書がある。

・本殿小屋組内に現向拝の旧手挟があった。

・竹生島大工阿部家より「竹生島神社の図及永禄八年より永禄十二年」の書き込みのある図面二枚が発見され、この図の寸法および

絵様と今の庇部分と向拝部分がよく合致している。

・びわ町の八幡神社に「新造御遷宮」と表記した社名のない永禄十年（一五五八）九月六日付の棟札が所蔵されており、これが都久夫須麻神社のものと考えられる。

以上のことから、修理工事報告書では永禄一年十月十一日に失火により焼失した後、永禄十年に本殿を再建するが、慶長七年に現身舎部分を移築し、旧本殿の庇部分と向拝部分をその身舎に取りつけたものであると断定する。すなわち都久夫須麻神社本殿は造営年代の異なった二つの建物を足して一つの建物とした合成建築であり、そのような非常に手間のかかる工事を行ったのは身舎部分が伝承のとおり移築された建物であるからだという。そして、前身建築については、身舎右側面前より十三本目の地垂木上端の墨書「盛阿弥 夫下始作内吉蔵也 此塗物は太公にてぬり申候也（後略）」より、太公は方広寺の太公のことであるから、この身舎は方広寺からあまり遠くないところの建物であり、伝承通り伏見城の遺構であるとす。この前身建築については桜井敏雄氏も『日本建築史基礎史料集成 社殿Ⅲ』で、この墨書を踏まえて、太公といえば方広寺のことであり、また豊国廟は秀吉を祭るが名目上は方広寺の鎮守として建てられたので宝蔵寺唐門と同様豊国廟より移築した可能性があるとす。さらに方広寺内にあったであろう秀吉の御霊屋のような建物の可能性も併せて指摘する。また、同じ『日本建築史基礎史料集成 社殿Ⅲ』の概説のなかで大河直躬氏は豊国廟の遺構と推定し、方三間の間取りが、高野山にある徳川家康と秀忠の霊廟や伊達政宗の霊廟であった瑞鳳殿と同じことから秀吉の御霊屋だった可能性がある

とする。¹¹⁾

しかしながら、墨書の「大仏」というのは必ずしも方広寺を指すのではないのではないだろうか。豊臣秀吉が方広寺大仏殿を造営する際に、諸国から動員されてきた職人たちは、大仏殿完成後もその周辺に居住し「大仏」と称したのである。¹²⁾慶長十七年の名古屋城作事では大仏久兵衛、大仏甚右衛門、大仏久八など「大仏」を称する大工が散見できるし、慶長十八年の慶長度内裏造営でも、大仏甚右衛門、大仏源左衛門、大仏越後、大仏藤左衛門、大仏助作などが存在する。このうち応其が方広寺作事の際に紀州と大和から連れて来たいわゆる「大仏十人棟梁」として「大仏」を名乗っていることが確認できるのは源左衛門と喜多越後だけであり、「大仏」というのが地名もしくは大工組名であることがうかがわれる。¹³⁾さらに元和五年の女院御所作事では、「大仏組」が12組認められる。作事の際に作られた『大工日数寄帳¹⁴⁾』では表紙に「大仏・東福寺・伏見・山城」「立田・吉田・勢野・片岡・箸尾・松笠・市本・窪田」「奈良・郡山・西京・矢田」とあり、大工を地域ごとにとまめて記していることから「大仏」というのが地名である事がわかる。その後も寛永十八年の寛永度内裏造営、寛永十九年の東寺五重塔作事、承応二年の承応度飯内裏造営、寛文二年の寛文度御所造営などで「大仏」を称する大工が認められる。¹⁵⁾さらに下ると『京都御役所向大概覚書¹⁶⁾』には「大仏問屋町」「大仏平塚通」「大仏鞘屋町」などの地名がみえる。また寺社伝奏之事に「嵯峨 清涼寺」「和州 小池坊」「播州 八幡月輪寺」等と並んで「大仏 智積院」と記されているのは「大仏」が地名であった何よりの証左である。豊臣氏の権力が大いに残存し

ていた慶長六、七年までの時点で「大仏」で塗られたということは、前身建築が豊臣氏の造営になる建物であったと考えてよいだろう。もちろん豊国廟である可能性もあるが、「極楽門」移築を日記に記した神龍院梵舜が、「極楽門」以上に重要と思われる建物を移築するときにも記していないというのは不自然であり、豊臣氏が造営した建築全体に範囲を広げて考える必要がある。

二、建築彫刻

二― 宝蔵寺唐門・観音堂

宝蔵寺唐門・観音堂・渡廊のうち、唐門は彫刻で充填されているが、観音堂は壁面と欄間に彫刻がはめ込まれているだけで、渡廊に至ってはまったく装飾がない(図8)。

唐門は二本の太い本柱の上に冠木が通り、そのうえに出三斗のせ大虹梁を受けている。虹梁の上には大きく堂々とした蓼股を置く。蓼股の内部は牡丹が彫刻され、その周りは破風下いっばいに松に瑞鳥の彫刻が充填されている(図9)。正面から見ると唐破風の部分に兎毛通しがないので、破風下の彫刻がよく見ることができ。虹梁と冠木の細長い空間は、松と牡丹のなかを飛び跳ねる3匹の兎の彫刻で埋められている。冠木下は両脇に袖壁があり牡丹唐草の彫刻がはめ込まれている。中央の棧唐戸にも牡丹唐草がはめ込まれているが袖壁のものとは別種の彫刻である。両側面は背面の控柱との間に腰貫をいれ金剛柵とする簡素なものである。観音堂との接合部分は控柱と観音堂の庇部分の縁先に立てた柱とを共有する形になって

いる。控柱間は虹梁型頭貫をわたし、中央に大瓶束を置いて梁を支える。そのうえにはやはり正面と同じ蓐股を置き、蓐股内は松と椿の彫刻をいれ、その周りには蓐股内と同じ松、椿とさらに瑞鳥を彫刻する(図10)。そして、虹梁型頭貫下には獅子が彫刻された持送りがあり、あとの二方向には木鼻がついているが、観音堂の縁先は唐門に面している側はすべて霧除けの板壁になっているので、木鼻の部分は壁をくりぬいている。飾金具は破風板と大虹梁、輪垂木についている。

棧唐戸は一枚の扉を棧と框で横方向に二つ、縦方向に五つに分割する(図11)。横棧は吹寄になつていて、上から一段目と三段目は細く、最下段の五段目はそれよりやや大きい。二段目と四段目の入子板がもつとも面積が大きく、伸びやかで力強い牡丹唐草の彫刻を入れる。この扉をよく見ると横に二つに分割されたうち吊元側の幅が広い。一段目と三段目の細い入子板の彫刻を見ると、幅の広い方、吊元側では花を中心に左右対称の図柄になっているのに、幅の狭い方、手先側では、向かって右の扉なら左端、向かって左の扉なら右端、すなわち門の中心側が切られている。また、同時代の天瑞寺寿塔覆堂や醍醐寺三宝院唐門、都久夫須麻神社本殿、豊国神社唐門などでは棧唐戸には飾金具を打つのが通常であるが宝厳寺唐門の棧唐戸には全く無い。これらのことから、この棧唐戸は移築の際に作り直されたものであることがわかる。しかも横幅だけではなく、棧唐戸上部に飛び出した棧にも入子板がはめられていた痕跡があり、高さも低く変更されている事がわかる。この唐門が立つのは斜面の狭い場所であり、移築にあたり高さ横幅ともに縮小されたのに違いな

い。横幅の縮小は唐破風があるのでそれほどではないだろうが、高さは同時代の唐破風付四脚門と比較すると明らかに立ちが低い²¹⁾。

観音堂は前述したようにもとあつた堂を一部残して手を加えたと思われ、唐門と同じ慶長八年に竣工している。この観音堂にも身舎の外壁面を中心に彫刻が施されている。唐門を入った突き当たりの連子窓の下とその隣の壁面に牡丹唐草の彫刻がある。そして反対側、渡廊と接続しているほうの側面には二つの連子窓の下とその横の壁面の一部に牡丹唐草の彫刻がある。内部では内外陣境五間のうち三間が連子窓、二間が格子戸となつているが、向かって左から二間目の長押上と右端間の長押上に彫刻があり、それぞれ紅葉と牡丹に鹿、鳳凰が彫刻されている。そして右端間の連子窓の下と渡廊と接する側の内壁に牡丹唐草の彫刻がある。このうち、連子窓の下壁ではそのまま横長の壁面にはめ込まれているが、床から内法長押までの大きな壁面では、棧と框で縦横に三つに分割される。棧と框は面取をし、地色は黒に面取部分は朱を塗る。この彩色と面の分割の仕方は唐門の棧唐戸とまったく同じである²²⁾(図12)。またこれら壁面の牡丹唐草の彫刻は全て同じ意匠であるが、かなり巧拙が認められ複数の工匠の手になるものと思われる。そして、形状を無視して機械的に壁面の大きさに合わせて刻まれており、本来この壁面のための彫刻ではなく他の建物のものをはめ込んだことが一目でわかる。唐門が豊国廟からの移築であることから、これらの彫刻も豊国廟のいづれかの建物から竹生島に運ばれたに違いない。

二―二 都久夫須麻神社本殿

第一章で述べたように、都久夫須麻神社本殿は本来身舎部分と庇部分は別々の建物であるが、どちらにも彫刻が施されている。

身舎正面の棧唐戸は黒漆塗で棧や框には飾金具を多用し、繊細で優美な菊の彫刻をはめ込む(図13)。その両脇間は向かって左が菊、右側が芙蓉に瑞鳥であるが、どちらの彫刻も土坡から上に伸びて行く様子は伸びやかで流麗である(図14、15)。そして図柄が途中で切れておらず、当初よりこの部分のために彫刻されたものである事がわかる。ただ幕板の彫刻は解体修理後も彫刻が落下し応急的に適当にはめ込まれたのか、現在は修理工事報告書に記載されているものとは大きく異なっている。身舎正面壁面はこのようにすべて彫刻で覆われ、長押、柱、方立はすべて高台寺蒔絵となり飾金具をうち、組物は極彩色と類を見ない壮麗さである。側面と背面も同様に両端間壁面に彫刻が施されている。

一方、庇部分にも彫刻が施されている。正面長押上の琵琶板と左右の脇羽目板、そして、正面を除いて三方を板壁で覆われているが、その両側面の前三間の長押下板壁と四間すべての琵琶板に彫刻がはめ込まれている。これらは全て、観音堂の彫刻と同じく切りあわせてはめ込んであるので、元来この庇部分の建築に合わせて作ったのではなく後からはめ込んだことが一見してわかる。背面は壁面に彫刻をはめ込んでおらず、五間とも中備の藁股だけである。両端二つは内部の彫刻が欠失しているが、残り三つは牡丹に獅子、雲に鏡、月に雲が彫刻されている。いかにも室町時代らしい彫刻であり、この藁股と正面二箇所の木鼻と向拝の手挟は永禄十年のものであるこ

とが判明している。

本論の主題である正面両脇にある脇羽目彫刻は、大きな牡丹と渦を巻く唐草を自由奔放に組み合わせており、その大胆な意匠は他の建築彫刻には見られないものである。そして、その彫りは鋭く確かで、相当高度な技術を持った工匠の手になるものと思われ、その意匠の素晴らしさと相まってのびやかで律動感のある彫刻となっており、桃山建築彫刻の最高傑作といっても過言ではない。残念ながらこの場所にはめ込まれる際に上部と左右が切断されたようで、本来はもう少し大きな彫刻であったと思われる。これと同じ牡丹唐草は庇板壁の向かって左の側面前一間目と琵琶板左右各四間、さらに正面向かって一番右側の庇琵琶板にはめ込まれているが、琵琶板では大きい彫刻を小さい部分にはめ込むために彫刻が何の配慮もなく切られている。残りの正面庇脇羽目上部の小壁と側面庇板壁の残り五面にも牡丹唐草が彫刻されているが、こちらは脇羽目の牡丹唐草とは少し異なり、よくみると宝厳寺観音堂の壁面の牡丹唐草と同じ図柄であることがわかる(図16)。庇部分の正面にある丸彫りの牡丹と籠彫りの菊の木鼻が宝厳寺唐門と観音堂の境にある木鼻と酷似していることとあわせると(図17、18)、宝厳寺観音堂と都久夫須麻神社本殿の庇部分の彫刻は同じ建物から運んできたのは間違いない。ということは、庇部分の彫刻も元は豊国廟のいずれかの建物を飾っていたのである。また、正面琵琶板には瑞鳥の彫刻があり、いずれもうまく琵琶板にはめ込まれているが、よく見ると鳥の尾や菊の花が途中で切れている部分があり、やはりこれらもあとからはめ込まれたと思われる(図19)。

このように見ていくと、都久夫須麻神社本殿の身舎部分の前身建築と庇部分の彫刻は切り離して考えないといけないこととなる。²³すなわち身舎部分の彫刻は慶長七年に移築された時には既に壁面を飾っており、おそらくは造営当初より身舎に付属したものであるのに対して、庇部分の彫刻は慶長八年に豊国廟から唐門を移築したときに、観音堂と共にはめ込まれたものである。では脇羽目彫刻は具体的には豊国廟のどの部分の建築彫刻であったのか、次章で検討したい。

三、脇羽目彫刻について

三―一 絵画資料の検討

豊国廟を描いたものとしては第一章で「神門」について検討した時に述べたように、豊国神社蔵と徳川黎明会蔵のふたつの「豊国祭礼図」、いくつかの「洛中洛外図」、さらに「東山名所図」などがあげられる。これら絵画史料は建物を画面に収まるように規模を変えたり、位置をずらしたり、省いたりと必ずしもありのままではないし、粉本使用の問題もあり、決して第一次史料とはなりえないが、豊国廟が現存していない以上、同時代の記録として非常に重要なものである。主な作品何点かについて検討を加える。

豊国神社蔵「豊国祭礼図」(狩野内膳筆) (図20)

慶長十一年に完成したもので、慶長九年の豊国大明神臨時祭礼の記録画的性格をもち、²⁴この時点での豊国廟を比較的忠実に再現していると考えられている。まず一番西側、築地に西大門とでも言うべ

き惣門がある。これは明治維新前には蓮華王院西大門であった現在の教王護国寺南大門にたいへんよく似ており、三間一戸の八脚門で切妻造、頭貫と内法貫間に藁股を入れている。それを入ると楼門がある。この楼門は東側に鳥居があることから『義演准后日記』慶長五年五月十二日の条に、

豊国明神ノ鳥井ノ西二、廿間斗ノ二階門建立、大坂極楽橋ヲ被引了、二階ノ垂木少々出来了、中間ノ二階ハ猶自余ヨリモ高キ也、柱以下悉蒔絵也、下ノ重円柱悉黒漆也、結構驚目耳、

とある大坂城内の極楽橋を移築したものであると思われる。ただし祭礼図では丹塗りとなっている。その楼門を通って進むと左手には多宝塔が見える。これは『愚子見記』の「一、多宝塔一基 神子屋 馬屋 是楼門下二有」に合致する。さらに参道を東に進むと廻廊が広がり中央には楼門が建つ。その廻廊で区画された境内にはさらに透塀で区画された区域がありその中には権現造の本殿と拝殿がある。楼門と本殿を結ぶ中心線上には、手前より、楼門、舞殿、平唐門、拜殿・石の間・本殿がある。舞殿は三間四方の吹き放しの社殿で、高欄付、軒唐破風もついている。左右には鼓楼と鐘楼があり、その他二つの社殿が見える。透塀の中の本殿と拜殿ともに入母屋造で、拜殿には千鳥破風がつく。本殿は桁行七間、梁間四間、石の間は桁行三間、梁間不明、拜殿は桁行七間、梁間三間で向拝が三間と工の字型になっていて、『匠明』の図面(図21)とは異なる。『愚子見記』とは本殿の桁行こそ異なるが、それ以外は同一である。拜殿には縁が廻っており、向かって左側には御供廊があり御供所へと続く。なお透塀は本殿妻側に接続していて、内庭が社殿を取り囲むよ

うになっていない。豊国廟の規模や建物の配置はかなり正確に描かれているようであるが、全景を描こうとする余り細部には手が廻っていない感がある。

徳川黎明会蔵「豊国祭礼図」(図22)

慶長後半期に描かれたとされている²⁵。豊国廟は単なる背景の一つに追いやられていて、判明する限りで景観を述べると、八脚門の物門は見当たらず、極楽門を移築した楼門があり、鳥居はないが左手には多宝塔が見える。さらに東に進むとやはり廻廊と楼門がある。楼門を入ると、三間四方の吹き放しの舞殿があり、左右には鼓楼と鐘楼がある。向かって左奥には御供所と御供廊があり、右手前には社殿が一つある。これらは豊国神社本と同じだが、右奥にある社殿らしきものがあるのは異なる。慶長十一年に描かれた豊国神社本は描かれていないことから、慶長十八年に完成する護摩所であると思われる。『愚子見記』にも護摩所は本社²⁶の南に位置すると記されている。透塀に囲まれた中には本殿は見えずかろうじて拝殿の向拝までだけが見えるが、門は平唐門、向拝は三間である。

東京国立博物館蔵「洛中洛外図」(舟木家旧蔵本) (図23)

京の景観描写よりも時勢の情景描写に力点がおかれ、動的な迫力を持った作品であり、制作時期は元和二、三年ころと見られている²⁶。左隻の中央に二条城、右隻の中央に方広寺と、徳川氏と豊臣氏を象徴する建築物を大きく描くため周囲のものは大きく歪曲されている。豊国廟も例外ではない。ここでもやはり惣門は見えないが、二つの楼門はある。また鳥居も描かれるが多宝塔はない。廻廊の中は高欄付の吹き放しの舞殿はあるが、鐘楼、鼓楼はなく右手前には二

つの社殿が描かれる。平唐門を通過して透塀の中に入ると千鳥破風のついた入母屋造の拝殿があるが桁行三間、梁間三間、向拝一間と小さいものに描かれている。おそらくスペースの関係で小さく描かざるを得なかったであろう。石の間は桁行一間、梁間不明、本殿は桁行五間、梁間不明でやはり工の字型である。周囲には縁が廻り、社殿は黒漆塗で、屋根には金箔瓦が使われている。本社²⁷の細部を見ると、拝殿は軒唐破風と千鳥破風がつき、軒唐破風下は彫刻で充填され、向拝の虹梁型頭貫には彩色が施され木鼻も見える。また拝殿本殿ともに妻組は二重虹梁太瓶束である。これらは豊臣秀頼造営寺社を中心として慶長年間に畿内で多く見られる建築的特徴であり、舟木家旧蔵本「洛中洛外図」が実は建築細部をしっかりと描いている事がわかる²⁷。そして拝殿の横に透塀が描かれるが、腰長押が廻り、腰長押の上は連子窓、腰長押の下には大ぶりの牡丹唐草の彫刻がはめ込まれている(図24)。建物から類推するとその牡丹の花の大きさは都久夫須麻神社本殿底部分の脇羽目彫刻のそれに匹敵し、まさに脇羽目彫刻を描いたものと考えられる。

岡山美術館蔵「洛中洛外図」(図25)

制作年代はやはり元和三、四年頃であるという²⁸。惣門や鳥居などは金雲で見えないが、廻廊で囲まれた中に楼門を通過してはいると、やはりまず吹き放しの舞殿があり、その左右に鐘楼と鼓楼、さらに二つの社殿がある。平唐門を通過して透塀の中にはいると工の字型の本殿・拝殿・石の間があり、石の間あたりから回っている透塀の途中に神供所と弊殿らしいものがある。また廻廊の外にもいくつかの社殿が描かれているし、多宝塔もみえる。建物の構成や配置はしっか

りと描かれているが、建物の細部には余り関心がなかったようである。

勝興寺蔵「洛中洛外図」(図26)

制作年代は慶長末年から元和初めと考えられている。⁽²⁹⁾豊国廟に限らず建物は簡潔に描かれている。豊国廟も惣門こそ描かれるが、廻廊までの参道はほとんど描かれていない。楼門を入ると吹放しの舞殿があり、左右に鼓楼と鐘楼が描かれている。そして、そのそばには一棟ずつ社殿がある。さらに徳川黎明会本「豊国祭礼図」と同じように右奥に護摩所が描かれる。透塀の中にはいると、権現造りの社殿があり、拜殿と本殿は同じ桁行に見える。透塀はやはり本殿に接続していて神供所につながっているが、建物は簡略に描かれている。

個人蔵「東山名所図」(図27)

六曲一双で左隻には右上に清水寺があり、斜め左下へ門前町を連ねさらに左へ祇園社を配する。右隻には左上に豊国廟社殿を据え右下方に向かって鳥居や楼門や惣門を連ね、その左右に大仏殿や三十三間堂の一部を配する。豊国廟の社殿がこれほど大きく描かれているものは他にはない。ここでも他の絵画史料と同じく廻廊が廻り正面には楼門がつく。楼門を入ると正面には高欄つきの吹放しの舞殿があり、その左右には鼓楼と鐘楼がある。他に二つほど社殿がある。舞殿の正面には平唐門があり透塀が権現造の本殿を取り囲んでいる。もつとも、二つの楼門が二重門に描かれたり、舞殿が柱間のみなり広い一間四方に描かれていたりと建築的にはやや正確さを欠く。しかしながら、その中で注目すべきは社殿や透塀の彫刻が描か

れていることである。透塀の腰長押下に描かれた彫刻は、まさに都久夫須麻神社本殿庇部分の正面両脇の脇羽目彫刻を彷彿とさせるもので、大振りの花に大胆な唐草を配している(図28)。

以上、絵画史料の検討の結果、少し位置が異なるものの舟木家旧蔵本「洛中洛外図」と個人蔵「東山名所図」において、豊国廟の透塀に大ぶりの牡丹唐草の彫刻が認められる。

三―二 『舜旧記』の検討

豊国廟に関する文書史料が全く残っていない現在、絵画史料とともに『舜旧記』の豊国廟に関する記述は断片的であっても非常に重要である。ここでもう一度『舜旧記』を検討したい。

『舜旧記』によると「極楽門」を移築のために壊し始めるのは、慶長七年六月十一日である。同年五月二十六日には鍛冶三右衛門に「廻廊」の釘料を払い、七月二十六日には瓦師甚三郎に瓦の修理を申しつけている。そして、八月十五日には「次廻廊普請已下相済了」という記述がある。これらから、唐門を移築するのと相前後して廻廊にも手が入れられていることがわかる。ただ、これは瓦屋根であり、いずれの絵画史料にも楼門から延びる廻廊は瓦葺、唐門に接続する透塀は桧皮もしくは柿葺として描かれていることから、文字通り廻廊をさすのであろう。ところが、『舜旧記』によると慶長十年に「新廻廊」の建設が計画されている。旧「廻廊」は八月には壊し始めたと見え、「廻廊之コケラ」が吉田兼見に二七〇束と梵舜へ五〇束下されている。十二月八日には材木屋に材木料として百石が渡され、十四日にはさらに五十石が追加されている。そして年が明け

て慶長十一年六月十八日から大工藤右衛門が作事に当たることになり、七月二十六日には立柱、八月十六日に竣工する。二〇日ほどで工事は終わっている、全くの新築というより一部分の改築と思われる。その後藤右衛門は作料として三十五石受け取っているのだが、同年十二月二十八日の条には次のようにある。

豊国越、大工善右衛門ニ新廻廊之ホリ物料、重而ノ一石九斗遣也、少なくとも慶長十一年に新築された「廻廊」には彫刻が施されており、おそらく旧「廻廊」にも彫刻が施されていたに違いない。そしてこの旧「廻廊」は柿葺であるので、先の楼門に接続する廻廊ではない。前章で検討した絵画史料でも、楼門から続く廻廊には何も彫刻されていないし、当時、秀頼が造営した他の寺社の廻廊には彫刻を施したものは一棟もない³⁰。梵舜が慶長十年から十一年にかけて記す「廻廊」とは「透塀」だと考えてよいのではないだろうか。

以上、絵画史料と『舜旧記』を検討した結果、都久夫須麻神社本殿脇羽目彫刻は、豊国廟の透塀に施されていた彫刻であると結論付ける事が出来よう。とすると、この脇羽目彫刻は慶長四年に作られたものだとしたことになり、慶長三年に秀吉によって造営された醍醐寺三宝院唐門の菊と桐の彫刻とともに、桃山初期建築彫刻の気宇の大きさを表す作品であるといえる。

おわりに

『匠明』には父の平内吉政が作ったとして豊国廟の図面が記されているが、そこには柱の太さや組物を解説したあとに

… 同惣コカベアイ、又ハ木端（鼻）、何モ惣彫物ニ致候也、此図ハ山州東山豊国大明神。

と記され、豊国廟の社殿が如何に彫刻で荘厳されていたかが伺える。いずれにせよ都久夫須麻神社本殿脇羽目彫刻は、慶長四年の時点で当代最高の華やかさを持っていた豊国廟の遺構として十分ふさわしく、宝厳寺唐門彫刻とともに桃山美術の水準の高さを示している。

また本稿では都久夫須麻神社本殿身舎部の前身建築については考察しなかったが、墨書の「大仏」を方広寺とはせず「大仏職人」たちが集住していた場所と考えると対象となりえる建築は非常に多く、文献等の手がかりが全く残っていない状況では、現存する建築だけから推定するしかない。建築の形式から霊廟、亭などがあげられているが、灰野氏によって「（柱の蒔絵の）この焼けは尋常なものではなく、あるいはこの建物が火災等による高熱があてられたものとも推測できない」という興味深い意見が提出されている³²。ここでは、火災からの推測として、慶長五年の関が原の戦いで全焼した伏見城³³、建築彫刻からの推測として、慶長九年から十一年にかけて高台寺に移築された康徳寺をあげるにとどめておき、詳しくは次稿で検討したい。

註

(1) 慶長七年の棟札が現存している。(表面)

雨森長介

大野木五左衛門 慶長七年壬午年

御弁才天建立 御奉行片桐市正

大音市左衛門

西村清左衛門 九月六日

(裏面)

記載なし

(2) 滋賀県国宝修理都久布須麻神社境内出張所『国宝都久布須麻神社本殿修理工事報告書』一九三七年

(3) 『日本建築史基礎資料集成 社殿Ⅲ』中央公論美術出版 一九八一年

(4) 京都国立博物館『学叢』第三号 所収 一九八一年

(5) (表面)

恭惟法華独王頂上龍宝神最勝弁才天如意宝珠王者、天地開闢之大始稟受正体、陰陽運化之最初顕示靈情、(中略) 雖然与塵往々経星霜、殿閣之梁柱、摧朽傾斜於越内大臣豊臣朝臣秀頼公、辱有再興之貴命、片桐東市正欽奉施、届公廩不惜金銀、排官庫依運梁粟、一島伽藍、居諸不幾、修營畢矣、(後略)

片桐東市正

慶長八季癸卯六月如意珠日

且元(花押)

(裏面)

大工権守

小工但馬守

奉行

雨森長介(花押)

(6) 平内政信著、慶長一三年(一六〇八)頃成立(太田博太郎監修・伊藤要太郎校訂『匠明』鹿島出版会 一九七一年)

(7) 今輿政隆著、寛文一一年(一六七二)〜貞享元年(一六八四)成立(復刻版)

井上書店 一九八九年

(8) 監修…太田博太郎、校注…内藤昌『注釈 愚子見記』井上書店 一九八八年

(9) 武田恒夫「豊国祭礼図の特質と展開」『日本屏風絵集成』第一三巻 風俗画

— 祭礼・歌舞伎 講談社 一九七八年

(10) 前掲註(2)

(11) その他、様々な概説書等にこの都久夫須麻神社本殿の前身建築について推測

した記述があるので、主なものを紹介しておく、稲垣栄三『原色日本の美術一六 神社と霊廟』(小学館 一九六八年)では豊国廟の可能性があると

する。武田恒夫編『桃山の美術』(岩波書店 一九九二年)では豊国廟の建

物と断定し、「少しあとに内裏や二条城中に建てられた庭園建築によく似て

いるところから豊国廟の庭園にあった御亭だったのでないかと思われる」

(平井聖)とする。辻惟雄『岩波 日本美術の流れ七 日本美術の見方』(岩

波書店 一九九〇年)では豊国廟からの移築と断定する。平井聖『日本の美

術No.300 桃山建築』(至文堂 一九八二年)では豊国廟から移された可能

性が高いとし、伊藤延男『日本の美術No.65 日本建築の装飾』では豊国廟

の遺材をうつつして内陣としたとする。村上汎『日本の美術No.295 霊廟建

築』(至文堂 一九九〇年)でも「豊国廟の建築を移築したものと考えられ

る」とする。

(12) 横田冬彦「近世都市と職人集団」『日本都市史入門Ⅲ 人』東京大学出版会

一九九〇年

(13) 慶長四年の園城寺金堂の墨書には方広寺は「大仏」ではなく「大仏殿」と記

されている。

(14) 『禁中女御様御作事大工日数寄帳』元和五年成立、「大仏・東福寺・伏見・

山城」「立田・吉田・勢野・片岡・箸尾・松笠・市本・窪田」は宮内庁書陵

部蔵、「奈良・郡山・西京・矢田」は天理図書館蔵

(15) 吉田純一『京大工頭中井配下の棟梁層の形成過程と組織化に関する研究』私

家版 一九八五年

(16) 全七巻、享保三年以降に完成(『京都御役所向大概覚書』上・下巻)『清

文堂出版 一九七三年)

表1 向唐門

名称	年号	西暦	桁行	梁間
宝巖寺唐門	慶長8	1603	3.345	6.102
那谷寺本堂唐門	慶長2	1597	1.455	2.121
園城寺唐院唐門	慶長3	1598	2.235	0.950
賀茂御祖神社西唐門	寛永5	1628	2.333	1.242
日光東照宮正面唐門	寛永13	1636	3.030	1.880
建長寺唐門	寛永5	1628	4.092	2.364
輪王寺大猷院礼廟唐門	承応2	1653	3.091	2.182
賀茂神社唐門	江戸時代		3.020	2.150

(単位 m)

表2 四脚門

名称	年号	西暦	桁行	梁間	屋根形式
法華寺南門	慶長6	1601	4.552	3.667	切妻
葛井寺四脚門	慶長6	1601	4.539	3.72	切妻
西宮神社表大門	慶長9	1604	5.894	4.667	切妻
住吉大社南門	慶長11	1606	4.526	3.555	切妻
北野天満宮中門	慶長12	1607	4.848	4.970	入母屋 軒唐破風
北野天満宮	慶長12	1607	5.183	4.346	切妻
瑞巖寺中門	慶長14	1609	3.944	3.638	切妻
大徳寺勅使門	慶長18	1613	6.250	5.900	切妻 軒唐破風
南禅寺勅使門	慶長18	1613	5.909	4.848	切妻
大徳寺唐門	桃山時代		4.909	3.636	切妻 軒唐破風
豊国神社唐門	桃山時代		6.000	5.418	入母屋 軒唐破風
本願寺唐門	桃山時代		5.373	4.442	入母屋 軒唐破風

(単位 m)

(17) 第二卷「六十二」洛中地子之事(『京都御役所向大概覚書—上巻—』清文堂出版 一九七三年)

(18) 第六卷「六」諸職人之事(『京都御役所向大概覚書—下巻—』清文堂出版 一九七三年)

(19) 『京都御役所向大概覚書—上巻—』第一巻「十一」清文堂出版 一九七三年

(20) 正面破風下と同じモチーフであるが、かなり巧拙の差が認められる。

(21) 宝巖寺唐門は他の向唐門と比較すると破格の大きさであった事がわかる(表1)。同程度の規模の同時代の門としては四脚門になる(表2)。特に軒唐破風付であると雰囲気も似る。

(22) 現在は九面に分割されたうち一面のみに彫刻を残す外陣内部壁面と渡廊側外壁面の残りの部分にも同様の彫刻がはめ込まれていたと思われる。

(23) 修理工事報告書では身舎部と庇部の彫刻の質が異なると指摘している。また桜井氏も同様の指摘をされているが、都久夫須麻神社本殿の身舎棧唐戸の彫刻と庇脇羽目の彫刻が突出して対極にあるのであって、全体的に見ればそれほど差はないと考える。

(24) 武田恒夫「豊国祭祀図の特質と展開」(『日本屏風絵集成』第一三巻 風俗画—祭祀・歌舞伎 講談社 一九七八年)

(25) 前掲註(24)

(26) 辻惟雄「舟木家旧蔵本洛中洛外図屏風の検討」(『日本屏風絵集成』第一巻 風俗画 講談社 一九七八年)

(27) この他内裏などでも建築細部が非常に細かく描き分けられている。たとえば妻組をとってみても清涼殿は木連格子、西側の門は虹梁藁股、南門は又首組になっている。また南門は虹梁型に湾曲する頭貫、その上の桐を彫刻した藁股、若葉状の木鼻、飾り金具など現在の豊国神社唐門を思わせるような細部まで描ききっている。同時代の岡山美術館本と比べても建築細部がいかにも情熱を持って描かれているかがわかる。

(28) 辻惟雄「洛中洛外の展開—岡山美術館・舟木本を中心に—」(『近世風俗図譜』第四巻洛中洛外(二) 小学館 一九八三年)

(29) 前掲註(28)

(30) 日光東照宮では透塀はもちろんのこと廻廊にも彫刻が施されているが、寛永年間の造営になるものである。

(31) 『愚子見記』や「豊国祭祀図」(豊国神社蔵)とは異なり、石の間と本殿の正面幅が同じになっており、豊国社の平面を正しく伝えるものではないものの、豊国廟作事に関与したと考えられるという。(伊藤要太郎『匠明五巻考』鹿島出版会 一九七一年)

(32) 灰野昭郎「都久布須麻神社本殿の蒔絵装飾」(京都国立博物館『学叢』第三号所収 一九八一年)

(33)

『義演准后日記』慶長六年三月二十三日の条に「伏見城ニ伽藍残テ在之歟、見テ可参由仰了、塔婆ニ基・鐘樓・三間四方ノ堂在之云々、此三間方ノ堂、当寺御影堂ニ所望心中也、可訴訟哉思惟耳、」とある。

木村展子（きむら・のぶこ）

二〇〇〇年 神戸大学大学院博士課程修了

神戸大学大学院文化科学研究科助手

（専門）日本美術史、日本建築史

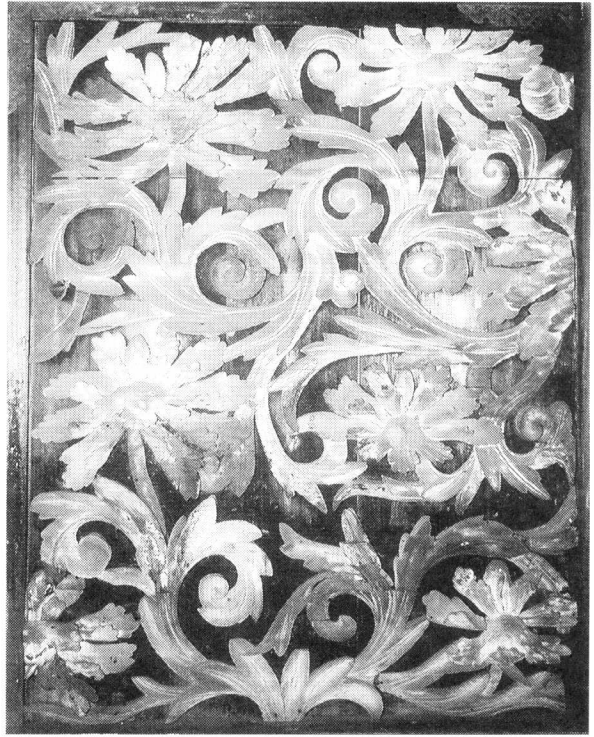


图1 都久夫須麻神社本殿
脇羽目彫刻



图2 宝巖寺唐門

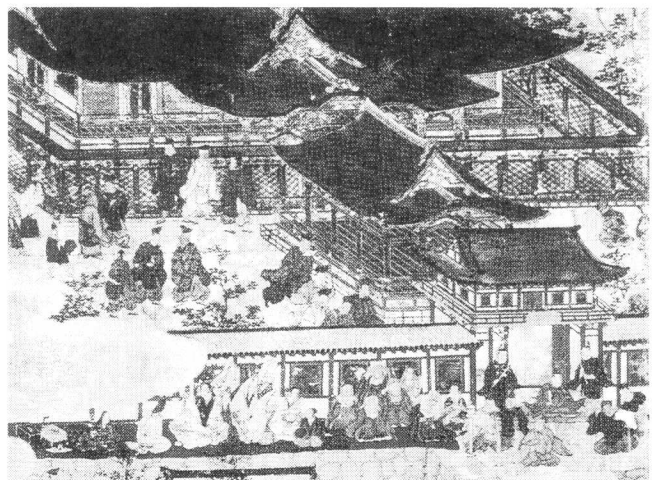


图3 豊国祭礼図（部分）
豊国神社蔵

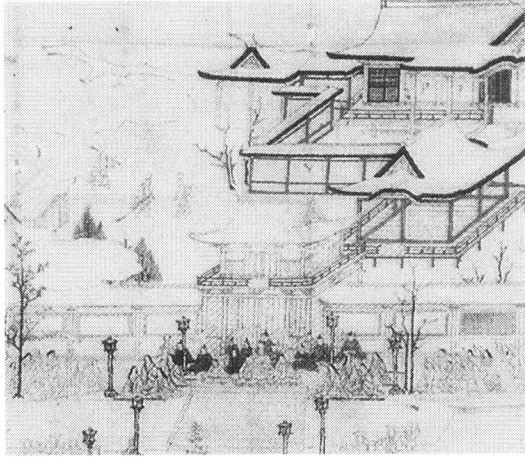


图5 豊国祭礼图（写本）（部分）
妙法院藏

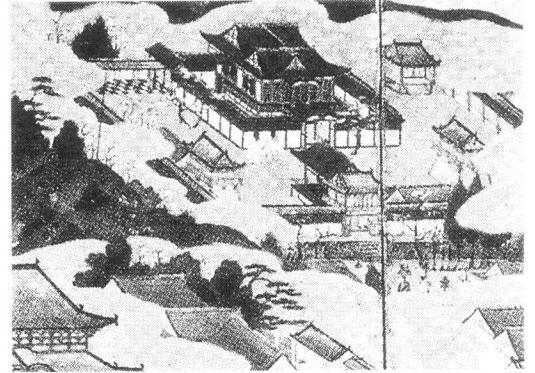


图4 洛中洛外图
勝興寺藏



图7 都久夫須麻神社本殿 内部



图6 都久夫須麻神社本殿 正面



图8 宝巖寺渡廊



图9 宝巖寺唐門 軒唐破風下（正面）

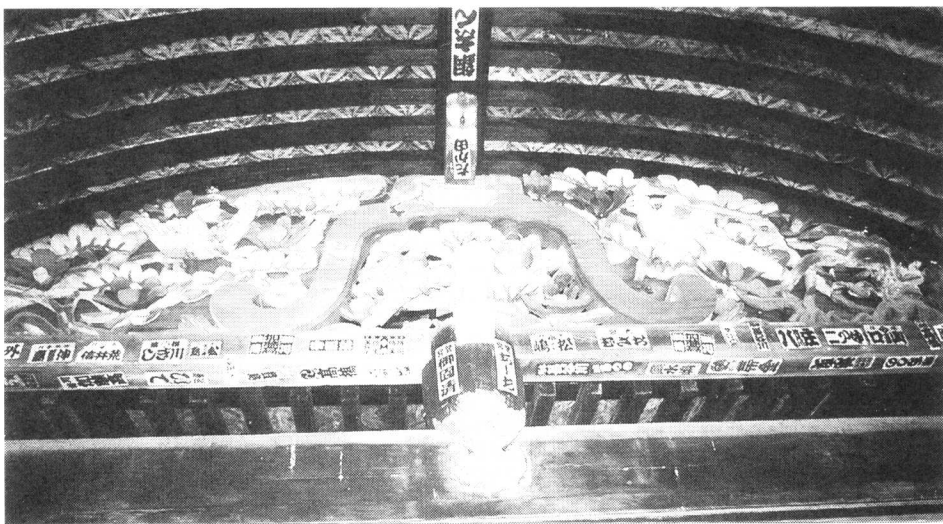


图10 宝巖寺唐門 軒唐破風下（背面）

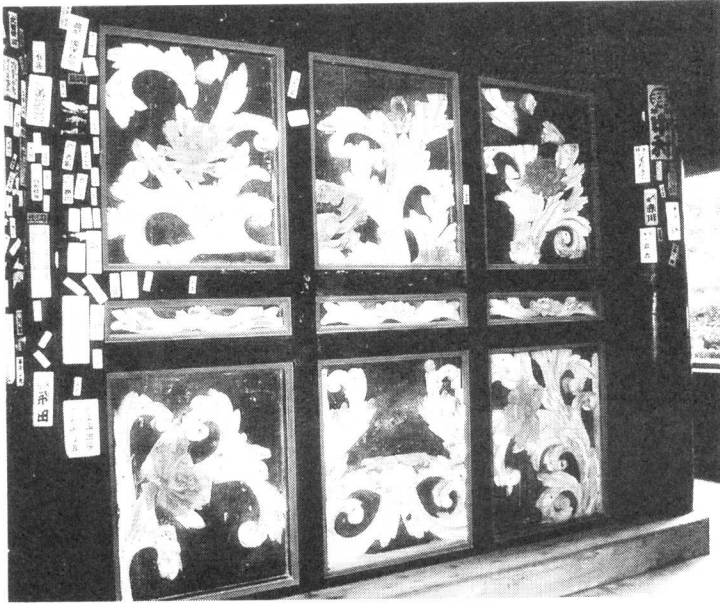


図12 宝巖寺観音堂 壁面



図11 宝巖寺唐門 棧唐戸



図13 都久夫須麻神社本殿 棧唐戸

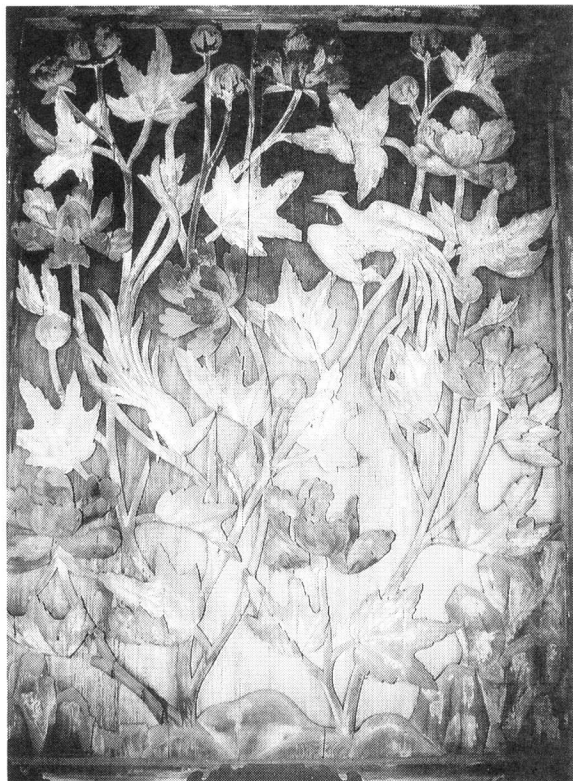


图15 都久夫須麻神社本殿
身舎正面

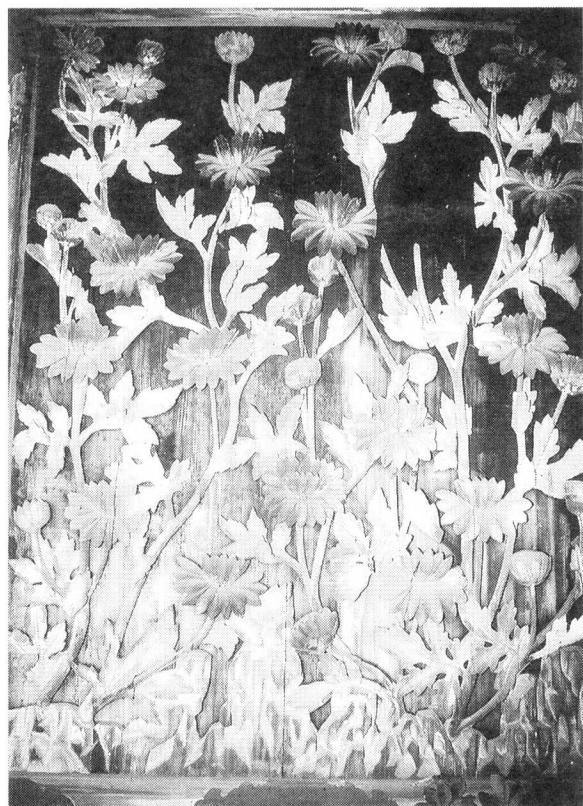


图14 都久夫須麻神社本殿
身舎正面



图16 都久夫須麻神社本殿
庇側面板壁



图17 宝巖寺唐門 木鼻

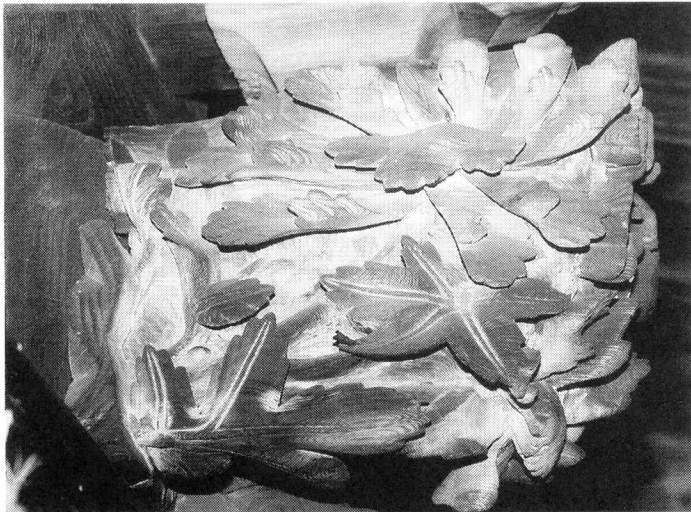


图18 都久夫須麻神社本殿
庇木鼻

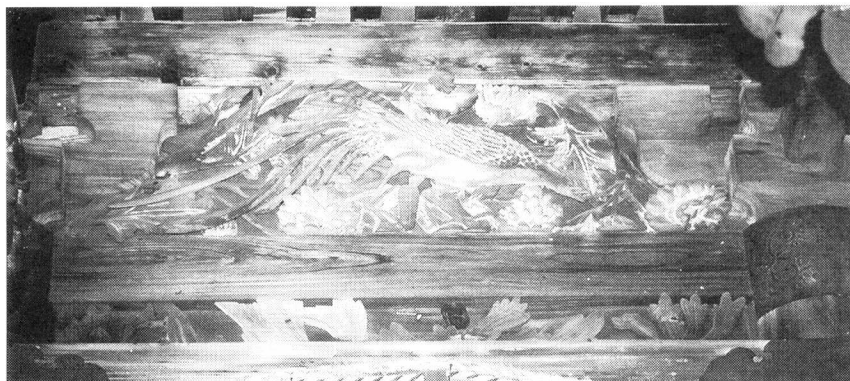


图19 都久夫須麻神社本殿
庇正面琵琶板

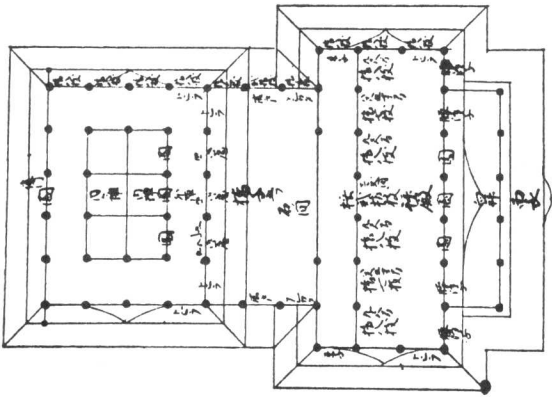


図21 豊国廟平面図
 (『匠明』より転載)

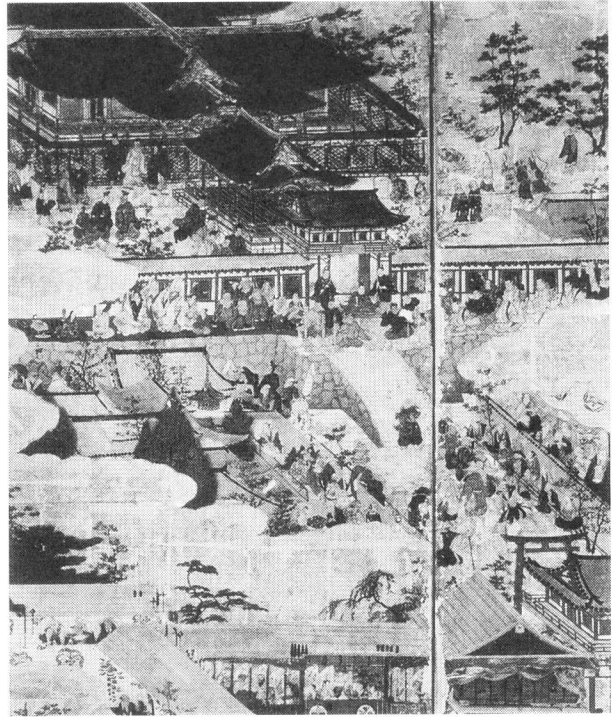


図20 豊国祭礼図
 豊国神社蔵

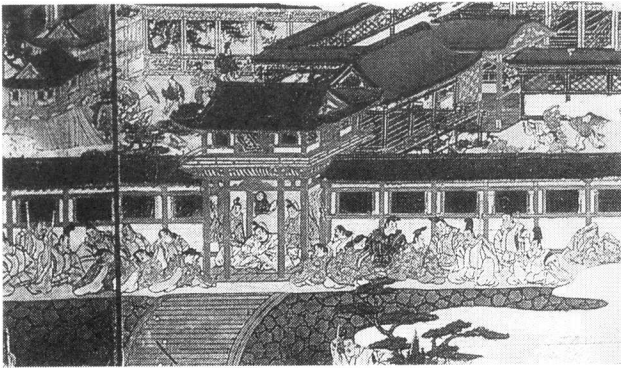


図22 豊国祭礼図 (部分)
 徳川黎明会蔵



図23 洛中洛外図 (舟木家旧蔵本)
 東京国立博物館蔵

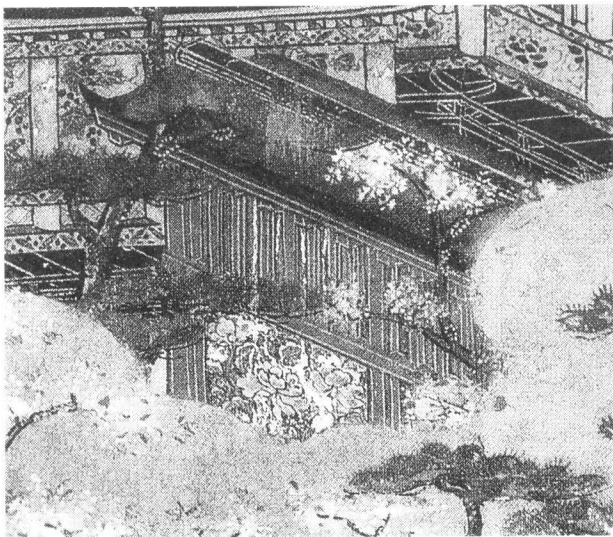


図24 洛中洛外図 (舟木家旧蔵本) 部分
 東京国立博物館蔵

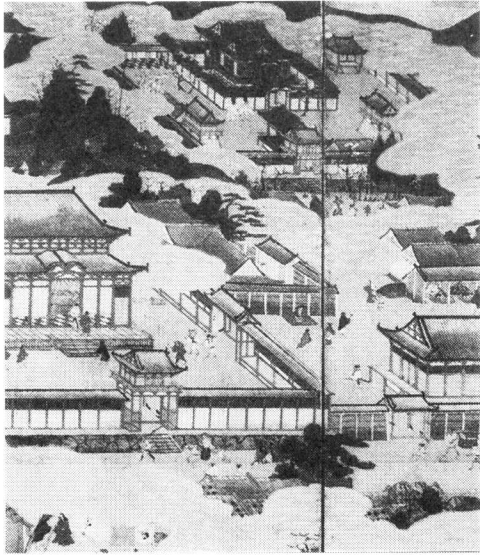


图26 洛中洛外图
勝興寺藏



图25 洛中洛外图
岡山美術館藏

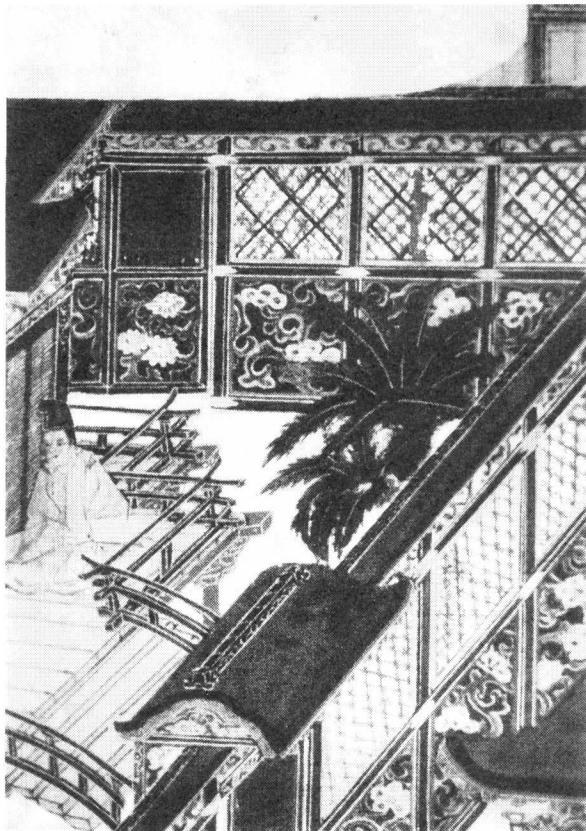


图28 東山名所图（部分）
個人藏

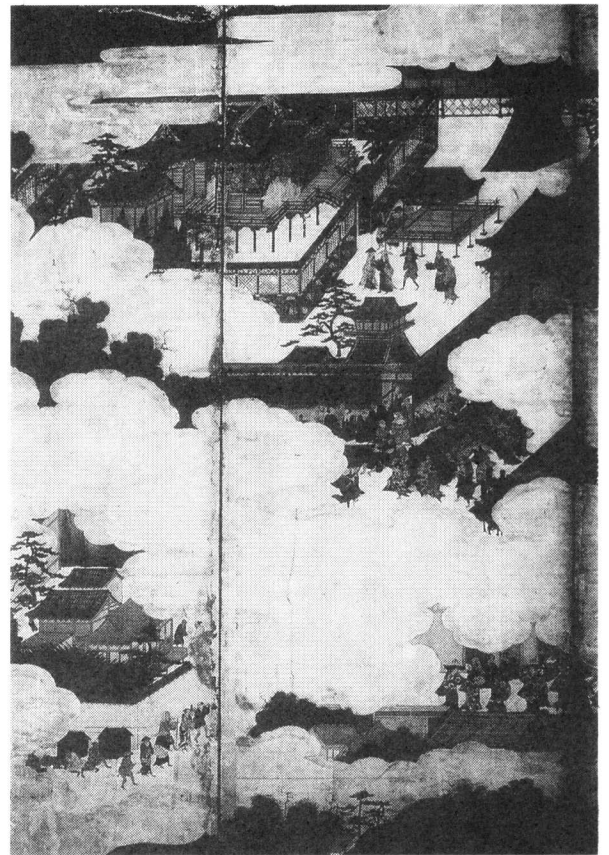


图27 東山名所图
個人藏